

10月20日
報告

「第17回 中国人受難者を追悼し 平和と友好を祈念する集い」など報告

中 清司

会場の準備

前日は雨で、夜半からは風が強くなり心配したが、当日の朝には風が収まり、青空に雲が浮かぶ心地よい天候となった。

テント設営の為、10時前に現地に着いたが、いつものように安芸太田町の有志の方が既に軽トラックでテントやパイプ椅子を運び込まれていた。会場周辺の草は中国電力により短く刈り取られていた。

発電所の真上に導水トンネルから出た水を一端溜める貯水槽があるが、その上で土砂崩れがあった。幸い貯水槽には流れ込まなかったが、防護ネットを張る為の工事が続いていた。碑に向かって右側に貯水槽まで登る坂道があるが、その道に沿ってみかん畑にあるような、資材を運搬するためのレールが延びていた。碑の両隣に工事事務所と資材置き場があるが、中国電力の配慮で当日はギフト包装のように白い布で綺麗に巻かれていた。

フィールドワーク

テントを張り、碑の汚れを落とすなど集いの準備を進めていると、参加者を広島駅で乗せたマイクロバスが11時に到着した。このバスで到着した方に、直接現地に集合された方が加わり、フィールドワー



クを開始した。先ず継承する会の川原洋子事務局長が発電所建屋前で発電所の概要を伝えた。

例年フィールドワークで貯水槽に上がるが、土砂崩れがあったので、代わりに今年は発電所内部を中国電力の方に案内して頂いた。発電所内が狭いため2班に分かれ、一方が発電所内を見学している間、他方は川原さんから発電所建設当時の様子を聞いた。安野発電所は発電需要が高い時（時間帯）に発電し、低い時は発電していない。幸いなことに当日は発電しており、建屋外でも音が聞こえていた。私はずっと屋外にいたので分からなかったが、地下のタービンのそばでは中国電力の方の説明が聞き取りにくいほど轟（ごう）音がしていた模様。

川原さんはB4サイズ程度に引き伸ばした建設当時の現場写真を掲示しながら、写真に収められた場所が実際にどこにあるか示したうえで、微に入り細に入り、ゆっくりとした口調で次のように話す。「現在見える水圧鉄管は戦後敷設されたもので、建設当時は垂直な立坑をセメントで固めた井戸のような構造であった。戦後それが水圧に耐えられず、崩壊した為、現在の水圧鉄管に作り替えた」「立坑は上下両方向から掘り進めた。上下が貫通した際、一人の中国人が土砂で生き埋めになりそうになったが、日本人の現場監督が降りて行き、脇に丸太を挟ませ、助け出した。この立坑の工事が最難関の工事であった」「山裾（やますそ）の斜面を削り、発電設備（タービン）を設置する為、地下深く、広く掘った」。

両班の発電所内見学が終わると、発電所敷地前の道路端に移動し、坪野収容所があった目の前で、川原さんが収容所の様子を伝える。坪野収容所には約100名が収容されたが、作業量が多く、他の収容所から応援で派遣され140名程度になることもあった。

その後「安野中国人受難碑之碑」の前に移動し、西松建設との和解後、中国人受難者の意見を取り入れながら碑を建立した経緯、西松建設と中国人受難者の連名で碑に刻んだ碑文の意義などを川原さんが解説。フィールドワーク参加者が碑を囲み、各自碑に見入る。



次いで、元西松安野友好基金運営委員長の内田雅敏弁護士が、西松建設との和解や碑の特徴について、鹿島建設との花岡和解や三菱マテリアル(戦前の三菱鉱業)との和解例と比較しながら解説。



于蘭芬さんと栄春さんが大阪総領事館領事と記念撮影



父・于瑞雪さんの名前を指差す于蘭芬さん(左)と栄春さん

集い

参加者が会場に到着するにつれ、そこかしこで再会を喜んだり、紹介し合う姿が見受けられた。そして今年は嬉しいことに11名という多くの来賓が駆け付けてこられた。

午後1時30分に集いが開会。司会の岡原美知子さんがこの集いの意義、碑の役割を伝え、それを大阪大学院生屈帥帥さんが通訳。足立修一弁護士が主催者を代表して挨拶。受難者于瑞雪さんの三女と四女が中国から来日され、四女の于栄春さんが「よくは知らないけれども熟知しているところに来ました」と挨拶。ここに来たのは2回目によく知らない



けれど、父から幾度も聞いてよく知っているところという意味でした。続いて安芸太田町の橋本博明町長が「微力であっても無力ではない」との言葉を胸に、日中両国の平和と友好の発展に努力する旨、伝えられた。中国駐大阪 薛劍総領事のメッセージを王宏偉領事が代読された。善福寺の藤井慧心住職の挨拶に次いで、広島県教職員組合の頼信直枝執行委員長が挨拶。「厳しい現実には絶望しそうになるとき、この安野は歴史に向き合うことを通し、真の友情を築きあげられるという希望、そして人を信じるということを教えてください」と述べられた。

来賓挨拶の後、二胡の演奏のもと、参加者全員が菊を一本ずつ碑に献花した。今年は初めて小笠原順子さんが演奏され、前年までとは違った調べのもとの献花となった。

閉会后全員が碑を背景にして集合写真に納まった。5年振りの復活。緊張がほぐれ、この時ばかりは皆笑みを浮かべての記念写真となる。

善福寺での法要

マイクロバスで移動された方を中心に 600m ばかり太田川を遡ったところにある善福寺に場所を移して午後 3 時前から追悼法要を行う。川原さんと藤井住職の気心が知れた掛け合いのもと、亡くなった中国人 29 名の内 5 人の遺骨を 1958 年に天津に送



還されるまで寺で預かり弔ったこと、1993 年に戦後初めて受難者が来広して以後、受難者や遺族が来日する度に善福寺で法要を行っていること、2017 年には遺骨が安置されている天津の勞工記念館で

も遺族と共に藤井住職が追悼法要を行ったことが伝えられた。次いで住職が読経される中で全員が焼香した後、遺族二人が謝意を述べ、住職に中国の茶葉を贈り、お開きとなった。

感想とお誘い

遺族の参加有無にかかわらず集いを開催することに意義があると思っているものの、やはり遺族が参加されることは意義深いと実感した。また、近年挨拶文の寄稿のみにされていた大阪領事館から 2 名が集いだけでなく、善福寺の法要にも参加されたことは、参加されていた全員の励みになったように感じた。お二人とも若く、気さくな雰囲気の方でした。

継承する会では、移動するマイクロバスの車内で DVD を上映し、集いの参加者に式次第を兼ねた冊子（挨拶文、碑の概要、受難者全員の氏名などを記載）を配り、フィールドワーク資料（有償）も用意しています。戦時中の複雑かつ特殊な事象の理解に少しでも役立つ為です。会報紙上でお伝えできることはごく僅かなので、毎年 10 月に開かれるこの集いや 8 月 5 日に行うフィールドワークに参加し、現地を見て頂ければ幸いです。参加をお待ちしています。

